



審査講評

第六十一回展審査部長

加藤 東陽

第六十一回全日本書初め大展覧会において、栄えある賞に輝いた皆さんに、心からお祝い申し上げます。

今年は、全国各地より席書の部三千百九十三点、公募の部一万四百七十三点、合わせて一万三千六百六十六点の力作が寄せられました。

書に親しみ、筆を持つ喜びを味わいながら、すばらしい作品を出品されました皆さんに心から敬意を表します。

審査会は、日本武道館において行い、「席書の部」を一月六日に二十二名の審査委員で、「公募の部」を同十九日に二十六名の審査委員で、一つの書きぶり（書風）や地域の偏りがないよう配慮するなど、公平かつ厳正に投票によって行われました。特に、公募の部においては、要項にある「書初めにふさわしい語句」かどうか、という観点からも検討されました。

その結果、内閣総理大臣賞に鈴木美千枝さん（席書の部）、日本武道館大賞に中村美月さん（公募の部）、文部科学大臣賞に吉本七晴さん、吉田真依さん（以上席書の部）、亀山歩識さん、山館茂さん（以上公募の部）をはじめ、各賞が決定いたしました。受賞された皆さん、誠におめでとうございませぬ。

作品のレベルが年々向上しており、審査にも一段と力が入りました。特に、上位の賞の決定にあたっては、一回目の投票では決まらず、決選投票を行うなど、実力が伯仲していたことも申し添えておきます。

また、公募の部では、作品の評価は高いレベルでしたが、色付きの画仙紙のために、出品要項の規定違反（用紙は白色）として選外となった出品団体がいくつかありました。誠に残念でなりません。くれぐれもご注意ください。

さて、今回展の特色として、次の三つを挙げてみました。

まず一つは、今年も小・中学生の席書と公募共に、全学年にわたって全国各地から地域性に富んだ力作が多数出品されていたことが挙げられます。全国的に筆のつながりを持つ書初め展であることを実感したことです。

二つめは、高等学校、大学及び一般の作品において、漢字・仮名共に臨書作品が多いと感じましたが、高校生の漢字仮名交じり書の中で、審査委員が「あっ！」と息をのむ作品がありました。被災された能登半島の皆さんへの一日も早い復興を願う気持ちを、自分の言葉で書いた作品でした。自分の目と心を育て、乗り越えたい壁に向かって言葉を運び、筆に托して作品づくりに取り組んだ姿は、とても感動し、印象的でした。

三つめは、審査後にわかったことですが、席書の部において、最高齢（八十三歳）の方が、見事に内閣総理大臣賞を受賞されたことです。静岡県伊東市から日本武道館まで足を運んで、しかも限られた条件（二十四分間で指定用紙二枚に書く）の中で、完成度の高い作品を仕上げたことに、審査委員一同、感激しました。いわゆる生涯学習（高齢化社会）を象徴するような、書の特質を物語るような、年を重ねても学びを継続し、年を重ねることに益々良い作品を制作できるということを立証してくださったのです。誠にうれしい限りです。

これからも「書初め」は、伝統文化の一つとして次世代へと継承してゆくことはもちろんのこと、時代の変化に応じた新たな創造と発展も求められます。

この「全日本書初め大展覧会」は、今年のこうした三つの動きが象徴するように、書道文化としての更なる充実・発展が期待されております。来年も、全国からの多数の力作にお会いできることを期待して、審査講評といたします。